

意識の反転
——レヴィナス『存在の彼方へ』におけるヘーゲル——

長坂真澄

論文「身代わり」(1968)、またそれをもとに書かれた『存在するとは別の仕方で、あるいは存在することの彼方へ』(1974)（以下『存在の彼方へ』と略）第4章において、レヴィナスは、ヘーゲルの『精神現象学』(1807)「緒論(Einleitung)」が語る「意識の反転(Umkehrung)」に言及しつつ、意識の反転をむしろ無起源の攪乱として語り直すことで、自らの思想をヘーゲル哲学の対蹠点に位置づける。ヘーゲル「緒論」からの引用は、ヘーゲルの思想と対照をなすレヴィナス自身の思想を支える諸概念——無起源、攪乱、強迫、異他触発——を導入する際の前奏のように用いられる。読者はそれゆえ、レヴィナスのこれらの諸概念を読み解く上で、「緒論」の理解を要求される。その読解から浮かび上がるのは、レヴィナスに固有の時間論である。

この時間論を理解する上で鍵となるのが、レヴィナスも目を通していたハイデガー『拙道』(1952)に所収されている、「ヘーゲルの経験概念」(1942-43)が展開する『精神現象学』「緒論」読解である。というのも、この読解においてハイデガーは、必ずしも時間が明示的に主題とされているわけではない「緒論」のうちに、時間論を読み取る視座を与えているからである。本発表では、これらのテキストを踏まえつつ、いかに「緒論」の諸概念が、レヴィナスのうちで継承されつつ解体されるのか、またそこから立ち上がるのは、いかなる時間論であるかを解明することを試みた。

本発表はこのため、以下の行程を辿った。まず第一に、ヘーゲル『精神現象学』「緒論」が語る「意識の反転」とはいかなるものであるのかを明確にし、その反転の過程の記述が、カントの認識論の批判として読み取れることを明らかにした。第二に、「ヘーゲルにおける経験概念」の「緒論」読解において、ハイデガーがヘーゲルのテキストのうちに根源的な時間の生成の記述を見て取ること、また、その生成する時間は、客観としての対象（存在者）が位置づけられる客観的な時間とは異なり、ハイデガーが『カントと形而上学の問題』(1929)で論じる、自己触発としての時間に相当するものであることを示した。第三に、以上の背景をもとに、レヴィナスが『存在の彼方へ』において、ヘーゲルと同じく「意識の反転」という表現を用いつつ、それをむしろ「自己触発」かつ「異他触発」であるような新たな時間の概念をもたらさうものとして記述していることを明らかにした。かくして本発表は、『存在の彼方へ』が記述する時間論を、カント、ヘーゲル、ハイデガーを経由する近現代の哲学史の中に位置づけることを模索した。